

パネルディスカッション

「景観まちづくりの新たな展開 ―景観法施行5年を迎えて―」

司 会	横張 真	日本都市計画学会常務理事
パネラー	富士谷 英正	滋賀県 近江八幡市長
	竹内 功	鳥取県 鳥取市長
	渋谷 俊彦	鹿児島県 出水市長
	岸井 隆幸	日本都市計画学会 会長
	秋田 典子	千葉大学大学院 准教授

○横張

ご紹介にあずかりました、日本都市計画学会常務理事を務めております横張です。これから1時間半ほどお時間をいただき、パネルディスカッションを進めたいと存じます。

パネルディスカッションを始めるに当たりまして、まず、私から本日のポイントを簡単に述べさせていただきます。

私なりに本日の3市長のお話と後藤先生のお話を総括しますと、論点として、大きく3つあったのではないかと思います。

第1点目は、私たちは景観といいますと、伝統的なまち並み、あるいは歴史的な構造物、遺構等を中心とした景観を大事だと考えがちですが、果たしてそれだけが景観保全の対象になるのでしょうか。後藤先生のお話の中では「生活景」という言葉がありましたが、こうした対象としての景観を少し拡張して今後は考えていく必要があるという点を、第1のポイントとさせていただきます。

第2点目には、3市長の皆様方及び後藤先生のお話の中に繰り返し強調されていた点ですが、人、ないしその人を生かす仕組みの問題で、単に対象物としての景観をどのように守ったらよいかだけではなく、そこに人の暮らしや営みがどのように絡むのか、また、そうした暮らしや営みの中から大事なものが酌み取られていく仕組みに注目していく点を第2のポイントとさせていただきます。

そして、第3点目としましては、景観の話をつたえただけで景観として切り離して考えるのではなく、例えば景観以外のさまざまなまちづくりの要因とどうつなげるのか、あるいは後藤先生のお話

にもありましたが、例えば都市部とそれから農村部とどのように一体的に一つのまちとしてつくっていくのかという空間的な議論にどのように景観をつなげるのか。つまり、そういった景観単体ではなくて、他の要因、あるいは他の空間とのつながりの中で景観をどう考えるという3つがポイントになるのではないかと思います。

そこで、パネルディスカッションでは、この3点を市長の皆様方、それから岸井先生、秋田先生にフォローアップを兼ねて意見をいただきながら進めていきたいと思います。また、最後のほうでは、皆様方からのご質問やご意見をお受けする時間もできる限りとりたいと思いますので、ぜひ活発なご議論をお願いします。

それでは、冒頭に、ご登壇いただいている中で、岸井先生、秋田先生に、これまでの話の中で、全体としてどのような印象をお持ちになられたかということをお伺いまして、その後、先ほど申しました3つの論点に従い話を進めたいと思います。

それでは、岸井先生お願いします。

○岸井 それでは、このディスカッションの皮切りということで、私の印象からお話させていただきます。

今日は、後藤先生の講演並びに3市長のお話をお聞きしながら、あるいはさまざまな景観法のその後の動きをおさらいしながら、いよいよ我々も第3ステージか第4ステージか、少しずつ違うステージへ進みつつあるのかなという印象を持っております。

実は景観がこうして話題になることは、景観法ができた5年前からではなく、第1段階としては、近代における最初のころ、さまざまな新しい経済活動に対する保全や保存といった反対運動が一時期大変盛んになり、京都とか鎌倉などで展開されました。

第2段階は、そういう高度成長が安定成長に変わり、日本の中での豊かさが実を結びつつある二十数年前に、公共空間を中心として、従来の公共空間と違う作り方があるのではないかと、つまり、安く早く合理的につくればいいということだけではないのではという各種モデル事業が積極的に展開された時期がありました。そのころには河川も、あるいは道路も再開発も区画整理も、いろんな意味でモデル事業という名前を打って、特に景観に配慮したことをやるぞということを打ち出しておりました。

そのころは、先ほどの横張先生のテーマで言えば比較的物、つまり、どのようないい物ができ上がるかということをおもな気にしていました。思い起こせば20年ほど前ですが、都市環境デザイン会議という都市環境のデザインにかかわる専門家の会議ができました。これは、いわ

ば土木、建築、造園、さらにはインテリアデザイン、サインといった照明、さまざまな分野の方たちが余りに連携がなく、そのようななかで事が進んでいくのは大変危険であるということで、連携して何とかしようということで始まりました。

そして、国の動きでは、公益法人の都市づくり、パブリックデザインセンターという組織が立ち上がり、今日も各市の方が受賞されていますが、都市景観大賞といった動きも始まりました。

都市景観大賞というのは、実はもう20年以上経ていると思いますが、最初の10年間は、まさに物を見ていい物を選ぶという観点でしたが、その後の10年間は、それだけではなくて、そこにどのように人がかかわっているのか、アクティビティ、人がどのようにその景観、空間に参与しているのかということに大事にして判断するという、まさに、先ほどの人の話に移りつつあったと思います。そうした公共空間のような、行政側が主導して自ら手を下すところから始まり、その周辺地域との一体感をより強めていこうという動きがあって、今日ここにあるような250を超える景観計画というのが出てきており、本日紹介のあった3市長のように、新しい先頭を切った動きもあちこちで見られていると思います。

しかし、問題は次のフェーズだと思います。そろそろ次のフェーズだろうというなかで、多くの都市で景観というものに対し認知され始めていますが、それは当然考えるべきことであると言われて、逆に、みんながやっているのだからやらなきゃいけないとなった途端に、私は同じものが出てくる気がします。いいところはまねをしていけばいいものになるのかもわかりませんが、一つ一つ個性のある地域が独自の道をどうやって歩んでいくのかということについては、より一層気を使う必要があるのではないかという印象を持ちました。

もう亡くなってしまいましたが、私の中学、高校の友人の中島らもという作家に、都市づくりパブリックデザインセンターの創刊号で、どんなまちが好きなのかというコラムをお願いしたところ彼が書いてきたのは、「ぼくがすきなまちを すきなきみがすき」。最後は「きみ」、人間ということなのですが、我々は景観や空間を媒体にしてやっておりますが、最終的にはそこにいる人、その人をいかに大切に空間があるのではないかという意味では、確かにそうかなと思いました。

一方で、空間を預かるほうとしては、やっぱり「きみ」と「まち」は一緒ではないかという気がします。好きなまちに好きな人がいてほしい、好きな人を大切にしてくれるまちはやっぱりいいまちなのではないかという印象を持っていて、その好きな人というのはいろんなフ

フェーズがあって、我々の両親も居て、おじいちゃん、おばあちゃんも居て、娘も居れば孫も居るといふ、さまざまなフェーズがあり、仲間もいっぱい居て、そういうそれぞれの仲間の中で何を大切にしていこうかというところで、今日の話であり、これから多くの自治体の皆さんが参考にされると思いますが、同じことが起きるとは私は思えないのです。やはり、そのまちで一番大切な人たちが居て、その人たちが何を考えていこうかということについて、本日の3市の表面ではなく、その中に流れているものが大変大事なのではないかという印象を持ちました。

○横張 ありがとうございました。

それでは秋田先生、お願いします。

○秋田 ご紹介にあずかりました千葉大学の秋田です。本日は、このような場で発言の機会をいただきありがとうございます。それから後藤先生の基調講演、富士谷市長の講演、竹内市長の講演、渋谷市長の講演、大変勉強になり、ありがとうございました。

個々にコメントしたいところですが、時間も限られていますので、全体的なことをお話しさせていただきたいと思います。

本日は、シンポジウムのテーマ自体が景観まちづくりということもあって、3市長、それから後藤先生も含めて、景観まちづくりという言葉が使われていたのですが、この景観まちづくりという言葉自体、今、岸井先生がおっしゃった第3段階の景観づくりということを意味していると思います。後藤先生が、景観という言葉は風景プラス地域で、日本オリジナルの言葉だと言われましたが、まちづくりという言葉も日本オリジナルの言葉で、片仮名で「マチヅクリ」と書いて外国でも報告しているのですが、その景観という日本独自の言葉とまちづくりという日本独自の言葉が結びついた景観まちづくりということ自体が、新しい日本の景観づくりの展開を象徴的に示していると感じました。

景観まちづくりという言葉は、もちろん景観法にも書かれていません。岸井先生が言われたように第2段階、以前に景観という話が出てきたのは1980年代ですが、1980年代に景観の話をするときは景観形成だとか景観づくりという言葉が使われていて、景観まちづくりという言葉はそのころは余り使われていませんでした。景観法自体にも、先ほど申し上げましたように景観まちづくりという言葉は全く出てきていないのですが、今我々が景観の話をしよとうというときに、共通用語として景観まちづくりという言葉を使っているということが、風景プラス地域、それからまちづくりがあらわす参加、協働、この4つの要素が合わさったものが日本のこれからの景観づくりになるのだと強く感じた今日のシンポジウムの講演でした。

簡単ですが、この景観まちづくりという新しい言葉がこれからの日本を象徴していくと感じたということでまとめさせていただきたいと思います。

○横張 ありがとうございます。

それでは、先ほど申しました3つの論点につきまして、3市長、岸井先生、秋田先生に、順次ご感想をお願いしたいと思います。

では、まず物ということですが、皮切りに竹内市長にお伺いします。今日のお話の中では鹿野の事例を中心に、いわゆる伝統的なまち並みを中心とした景観の保全に対する取組事例を中心にご紹介いただいたかと思います。一方で、こうした伝統的なまちの保全・保存に加えて、新たな方向性として、お考えがあれば一体どういう方向があるか、あるいは、今日のお話では鳥取市の中でも特に鹿野という限られたところのお話でしたが、鳥取における取組を、鹿野をいわばファーストステップにして次にどのように広げようとしているのか、その辺のお話を中心に、あるいは後藤先生や他の市の取組の印象なども交えながらご感想をお伺いします。

○竹内（鳥取市長） この景観まちづくりにとりまして、物や人という仕組みは大きな要素であると思います。しかし、先ほど報告した経験のなかで強調したいのは、こういった分類よりも、どちらかという思いとか人の心といった部分が大事ではないかということです。地域の方に400年前の亀井公の治世を慕う気持ちがあって、江戸時代を通じての領主は池田公でしたが、亀井公の伝統に寄せる思いが連綿とつながっています。山中鹿介の墓もあるのですが、島根のほうの尼子の再興を願って活躍したが、捕えられて殺された幸盛の墓が鹿野にあり、幸盛寺というお寺もあるという中で、鹿野祭りが地域の人たちの心の中に大きくありました。結局、お堀と石垣は残っていますがお城はなく、鹿野の城をずっと、江戸時代も明治になってからもずっと思っていた人たちが、鹿野祭りの似合う町というコンセプトで景観に配慮したまちづくりを始めるという展開が、さきほど紹介した内容で、そこには心や思いという部分が大きく、合併してもその地域の皆さんの心は変わらず、鳥取市全体の中でもそれをしっかり受けとめた行政と地域住民の取組が続いているというのが、報告の内容です。

鳥取には久松山という城山があって、内堀の一部しか残っていませんが、鳥取城の大きな城郭のお堀とか、その石垣が残っております。鳥取のもともとの中心部が城下町としてずっと栄えたわけですので、そこがこうした鹿野と対比の中で、例えば武家屋敷、それから商人の住んでいたエリアなど、もう少しまくいかならないのかなと思うのですが、実は、先ほど少し紹介した鳥取市の景観計画では、その久松山のふもとの城下町の地域を景観形成重点地区の一つに指

定しているのですが、先ほど鹿野のまちづくりでも出ていた地震や、鳥取大火という昭和27年の大火で相当失われたことに加えて、中心市街地の空洞化、ドーナツ化現象等でどんどん城下町らしい部分に変化をしてきたことで、なかなか進んでいません。しかし、問題意識はあるので、地域の方にもそうした鳥取城周辺の景観形成なりまちづくりをやろうという思いもあるのですが、なかなかうまく鹿野の経験などが生かされていないという課題があります。

もう一つ申し上げたいのは、これは過去の歴史を踏まえながらのまちづくりですが、中心市街地の課題では、鳥取駅周辺の整備も大きな中心市街地活性化の中でクローズアップされてきています。やはり公共交通機関の結節点でもありますが、郊外のショッピングセンターに客を奪われて、モータリゼーションにうまく対応できず、既存の商店街がいわゆるシャッター通り化するような寂れ方をしてきている状況があります。新しいまちづくりとしては、やはりこの駅周辺の整備をどうしていくのか、そこにおける景観の配慮はどうしていくのかといった場合に、そういう中心市街地の活性化や駅周辺整備に、鹿野で例を挙げたような心とか思いとかいうものがなかなか出てきそうにないというよりも、そういうことは難しいのではないかと思います。近代的な論理でいろいろ利便性とか機能性とか商業的な活性化などを目指したことはやれるのですが、もう一つ、何かの思いというものを駅周辺の整備にも持ってこられないだろうかと思えます。例えば、岐阜駅周辺には信長の金ぴかの像が立っていたり、何かシンボリックなものはあるのですが、私どものところでは大国主命と白ウサギの像はあるのですが、ちょっとした何か核となる思いを形成できるようなものはないのかという課題意識はあります。

また、新たな展開という意味では、久松山麓の大きな32万石の城下町であった一部だけでもと大手登城路の整備を平成30年度に向けて進めておりますが、やはりもう一つの近代的な新しいまちづくりの中での景観も含めた新しい思いとかコンセプトの部分が私の課題意識としてあります。

○横張 ありがとうございます。いま大変大事な点をつかれていましたが、単に物なのではなく、そこに思いや心がこもっていることが鹿野の成功であり、その思いや心というものが逆に言うとなかなかほかのところ、特に、中心市街地の活性化等の中には見出し難く、いま一つうまくいかない点でもあると拝聴いたしました。

今度は富士谷市長にお願いしたいのですが、例えば近江八幡市の場合、今日ご紹介いただいたように八幡堀を中心としたいいわゆる旧市街のところから景観整備が市民の手によってスタートして、それが次第に広がっていったというお話でしたが、例えば今の竹内市長のお話のよう

に、近江八幡市もやはりJRの駅近と旧市街との間に少し距離があつて、景観整備という旧市街であり、新市街のほうに関してはそうした議論は切り離されたという点もございしますが、こうしたこれまでの取組とした旧市街を中心とした議論をさらに市域全体に広げていく上でどのような点に注意すべきかお伺いします。

○富士谷（近江八幡市長） まず、近江八幡市の場合は、どこでもそうですが多くの歴史があり、景観づくりというのは、行政がヒントは与えても主役は住民というスタンスでとらえてきました。そのためには、若い人は今の姿を見て、これが今までであったのかなと考えがちですから、やはり高齢者がいるときにやっておかないといけません。

例えば近江八幡市の場合ですと、確かに城下町は駅から離れていますが、そこには伝統的建造物群が指定されています。そこで、行政が上から網をかけるのではなく、こういうのがあるけれども皆さんどうですかと呼びかけると、皆さんが前向きに我々も理解して協力することによって、初めて、今の伝統的建造物群が保全されていると私は思います。

昨今は、人には目を向けても自分の心に目を向ける機会や風潮がだんだん少なくなっていると思います。殺伐とした世の中になってきていると言われてはいるわけですが、例えばある地域の娘さんがどこかへ嫁いだとして、もう一度、あるいはいつでも、親元に帰りたい、あの風景を見れば、あの景観を見れば何となく心が落ち着くのだということを考えて、今は住民とともに取り組んでいます。

先ほどの講演でも申し上げたように、農村部では若い人が出ていく時代になりました。その理由を考えたとき、魅力がないまちに魅力を持たせるためには、その地域にしかない宝を見つける必要があると思い、最初は宝探しから始めました。

例えば、浅小井町という純然たる農村地帯では、だんだん若い人が出ていき、高齢者ばかりが残るようになりましたが、先祖がつくってくれた農地、水や緑を残そうと、みんながその地帯にしかないものを、行政の協力を得て大学の先生にも来ていただきながら探した結果、いぐさはこの浅小井町で最初につくられたことが分かりました。近江商人は、天秤棒でそのいぐさを担いで伊勢や京、あるいは江戸に運んでおり、昔はいぐさの長さを一遍に全部切る機械はありませんので、短くて軽いものは江戸に持っていき江戸間とされ、長くて目方があるものは京へもっていき京間と言われていましたが、いまここには「曳山とイ草の館」があり、その傍でいぐさの栽培をしています。いぐさは冬の寒いときに植えて暑いときに刈り取るのですが、そこでとったいぐさをいわゆる花台などに商品化して、「曳山とイ草の館」を見にこられた人に

販売していますが、若い人たちがそのような活動に目覚めて魅力を感じてもらえればと思います。

また、全体としては、景観自体に文化的な財産があることを国が認めて、水郷が重要文化的景観の第1号認定を受けました。その中心では300万人近い観光客が来られて、ヨシ原の中を櫓でこぎながら、四季折々の花や小鳥のさえずる声を耳にしながら水郷を巡っています。これはまさに水と緑そのものなのですが、何としても残そうと地元の人たちが言われて、行政がうかうかしていると、行政に突き上げがくるくらいです。

私は、これからの景観づくりは、行政はあくまでもサポーターに徹して主役は地域の人たちだと思います。例えば、行政が上から抑えると反発され、難しいことをいってもなかなか理解されません。それならば、若い人たちがここから離れたたくなくなるような地域をつくるのが景観づくりではないかということで、今、その地域でいいもの、宝をさがしてもらい、行政ではわかりませんので知恵を出してもらっています。

○横張 ありがとうございます。

今の富士谷市長のお話は、景観における行政は、トップダウンで網をかけて何かを実現するのではなく、市民が主導する話をサポートする側に回り、その際に非常に重要なことは、ほかにはない地域の宝や魅力をどう発掘してくるのか、また、それによってそこに暮らす方々、特に若い方々が離れたくないと思えるような、そうした魅力を発掘していくことと表裏一体で考えるべきものであるとのことでした。

次に渋谷市長にお伺いしますが、今日ご紹介いただいた中で、麓地区という重伝建のある江戸のころからの屋敷町が並んでいるところがある一方で、ツルが飛来する農村地帯もあり、全市的に景観に関する取組を展開されようとしているわけですが、二人の市長の話とも絡みながら、特に「物」としてどのようなところに着目しながら今後の景観行政を進められますか。

○渋谷（出水市長） 麓武家屋敷については先ほど一部紹介しましたが、平成7年に国の重要伝統的建造物群に選定をされたことから、武家門の修景についても当時の面影がしのばれるような修復をして保存に努めております。今回の景観法に伴って、景観条例を制定して、さらに一段とこのことについては加速していくと私は考えております。

先ほど後藤先生の基調講演の中にもありましたが、目に見える形、表面にあらわれる風景、そして、それを支える、つまりは地域、あるいは生活・文化、こういったものを今後どのように景観行政に生かしていくのかということが一つの課題として出てくるのではないかと思います。

す。先ほど言いましたが、出水市ではツルが毎年1万羽を超えて飛来しており、昭和27年には国の特別天然記念物にツルが保護されてから住民による保護が本格的に始まりました。

また、給餌について、ツルをたくさん集めるために始めたとの一部誤解がありますが、本来はツルが増えてきたことにより、周辺の農作物に被害を与えるようになり、この被害を防ぐために生まれてきたのが給餌という方法であり、始まりはそこに由来することをご理解をいただきたいと思えます。

また、地元の中学生、ツルクラブの子どもたちが、シーズン中に6回、毎朝6時前後に起きて羽数調査をやっております。その羽数調査6回の中で一番多い数字がそのシーズンの飛来数として正確な記録として残されてきています。このたび鳥インフルがツルに発生しましたが、子どもたちはマスコミの取材に対して、ツルは私たちの心の宝物ですと言って、ツルが鳥インフルに負けずに北帰行して、次のシーズンも元気で帰ってくるようにと、みんなで折りヅルを折り、その後市内の各小中高校、27校全てに呼びかけて、合計3万2,141羽の折りヅルを折ってくれました。先般、私のほうに贈呈があり、今は市役所の玄関に飾っています。これはやがて駅に飾り、そして最終的にはツル博物館、クレインパークに飾ろうと思っていますが、これほど子どもたちはツルに対する思い入れがあり、言うなれば一つのツル文化であり、まさに地元の皆さんと共存共生、これが見事に図られているということで、今後も大切にしなければいけないと考えています。

一方、武家屋敷のほうは、島津藩政時代に地頭職として出水にきた山田昌巖^{しょうがん}という方が、5万石溝という溝を掘って水利事業を行い水田の開発をしました。また、「出水兵児修養掟」という郷中教育^{ごじゅう}の規範をなした一つの文章もあります。これも山田昌巖時代に、言うなれば「二才どん」、子どもたちの教育をなすための規範として用いられ、今でも現代の言葉に直せば立派に通用する一つの教育規範だと思います。このように、文化が育ち、山田昌巖の遺徳をしのぶということで麓祭りが始まりました。

また、私どもの地域に「中の市」というものがあります。これは3月の彼岸の中日にそば市とも呼ばれる鹿児島県の三大市の一つにも数えられていますが、それぞれの家庭でそばを打って、かねてお世話になっている皆様方をお招きしてもてなすという風習です。

このように、これまで地域につながってきたいろんな風習、風俗、そして、そういった伝統的な文化、あるいは郷土芸能があり、我々行政としては、こうしたものを今後いかにその景観の中に生かすかが課題ではないかと考え、ツルを初めとして出水市にある独自の文化、風習、

風俗といったものを今後も守り育て、景観の中で生かしていきたいと考えています。

○横張 ありがとうございます。渋谷市長のお話もやはり、農村部にあってはツルを中心とした文化であり、また町場にあつては、特に麓地区における島津藩の時代からの文化が脈々とはぐくまれていて、こうした文化、あるいは風習、風俗、こうしたものと景観とをどうつなげていくのかというのが大きなポイントであるとのことでした。

さて岸井先生、今の3市長のお話を伺っていかがですか。

○岸井 先ほど秋田先生から、次のステージは景観まちづくりではないか、景観をつくるとか景観を形成するというにとどまらない、次のステップに向かいつつあるのではないかというお話がありましたが、多くの自治体の方がそういう中で考えられていることは、景観をビジネスとしてまちおこしをしてまちづくりになるのだということです。私は、それは否定すべきではないと思います。守るべきものがあり、あるいはいいものがあることが今日の3市長のお話にもあつて、そこに皆さん気がついて、そこをどのようにして守ろうかというとき、それがもたらしていた外部経済を内部化するという方法を考えることは決して悪いことではないと思います。

もう一つ皆さんが言われていたのは、一つは、守るべきもの、古いものがないところはどうか。簡単に言いますと、売り物がなくてビジネスモデルが成立しないが、そういうところは何もなくていいということではなく、景観というキーワードの中で何か手掛かりがあるかどうかというところが、まさに今これから議論される「人」のところであり、あるいは文化と呼んでいる「物」のところに踏み込まないと、なかなか簡単なことではないと思います。ですから、いかに頑張るかというのは次の第2ステージ、しかも新しいステージの第2ステップといたしますか、そこを我々が考えなければならないことではないかと思ひながら、お話を伺いました。各市長さんからのお話の中にヒントがあつたと思います。

○横張 ありがとうございます。

秋田先生いかがですか。

○秋田 まず、竹内市長がお忙しいということで、竹内市長の質問、意見に対する答えを中心に私の意見を言わせていただくと、確かに思いが共有されているところでの景観まちづくりは、比較的スムーズに進み、そうでないところでどうするかということですが、3つぐらい方法があり、一つは、先ほど近江八幡市長の話にありました宝を探すということです。私は、いくつかの自治体で景観計画づくりをお手伝いさせていただいていますが、短いところでは半年ぐら

いで作成するなど、非常に短時間で、景観計画などをつくっています。それは、行政の財政事情の問題もあると思いますが、やはり時間をかけて丁寧に探せば何か宝は出てくるという部分はあると思います。

それから、つくるということもあると思います。例えば、ここは東京ですが、東京マラソンも一つの景観になっており、後藤先生も人を見ることが景観である言われていましたが、今度、大阪でもマラソンが始まります。そういうイベントをつくってしまうということも一つ方法であり、それから、ツルにしても、これを景観だと見立てることも、つくることの一つかなと思います。

それから、思いが共有されていないところをどうするかという点ですが、これは、共有はされていないが一人の思いを支援するという方法もあるかと思います。例えば、私は静岡県の下田市で景観計画づくりをお手伝いさせていただきましたが、下田市は黒船というペリーの歴史がありますが、中心市街地の衰退も例によって漏れずにあります。そこで、中心市街地のシャッターの閉まったお店を何とか元気に見せようとして、1人の女性がハンギングバスケットというものを一生懸命されていて、中心市街地の中を花で飾るという活動をほぼ一人で頑張っていたので、条例をつくってそういう活動を支援することを考えました。一人の思いを制度で支え、1人が3人になり、3人が5人になり、ちょっと二重めいた話になるのですが、制度で支えていき、行政がそれをきちっと条例などをつくって支援していくということが、思いが共有されていないところで新しく景観まちづくりをしていく一つの方法になるかと思っています。

○司会（須藤）

ここで竹内鳥取市長さんが福島県のほうに公務でご出張でございますので中座させていただきます。

○竹内（鳥取市長） 今のお話大変ありがたくお伺いしました。また、先生方のお話を参考にして、これからも頑張りたいと思います。今日、会場にお越しの全国各地の皆さんもいいまちづくりをして、またいろいろお互いが勉強し合うということができたら大変すてきだと思います。

それでは先に失礼しますが、よろしくお願ひします。（拍手）

○横張 どうもありがとうございました。

それでは、再度仕切り直しということで伺いたいと思います。

最初に、富士谷市長にお伺いしたいのですが、今日のお話の中にもありましたが、近江八幡市は八幡堀の再生を契機に、恐らく全国的に見てもかなり早い時期から市民が主導した景観まちづくりがスタートしたまちであったと記憶しております。そうした市民が主導する景観まちづくりが、最初から住民の理解を得られたわけではなく、結果として近江八幡市全体へと広がっていったと思うのですが、何が成功要因として考えられますか。あるいは、特に行政としてはそれに対してどのような支援をこれまでされてきたのかお伺いします。

○富士谷（近江八幡市長） 八幡堀は、それまでゴミ捨て場になっていて、いわば荷物になっていました。異臭、悪臭が漂っていたなか、ある面では非常に合理的であります。それを整備して公園や駐車場にしてほしいという要望もありました。今思うと、成功要因としては、いい主導者が出てきたことと、堀というのは城の周りにあるが、この八幡堀は琵琶湖に直接流れ出ている地元の宝であること、そして、近江商人がこの堀を使い商売をして、その周りは商都、商売の町である近江八幡の城下町であったことに、地元住民も目覚めて何とかよみがえらせようという意気込みがあったことではないかと私は思います。行政は地元が言ってきましたら、駐車場、あるいは公園がいいかなと考えていた矢先、地元のJ Cを中心とする青年会の皆さんが堀を復元されまして、行政も逆に目覚めさせてもらったのではないかと思います。やはり、まず地元の皆さんの熱意があったということです。

そういう土壌がある中で、今度は農村を見ていきますと、先ほど申し上げましたように重要文化的景観第1号に指定された里山、あるいは西の湖、琵琶湖で一番大きな内湖なのですが、そこがすごく景観として文化財的な価値があると認められました。その近辺の人たちは、これは先祖が残してくれた大切な宝であり、我々はこれをもっと守り生かしていこうということで、そこでイベントが行われました。

どういうイベントかといいますと、琵琶湖の西の湖の中にこんざ権座という小さな島があり、その田んぼ1町、つまり1万平米ぐらいで、山田錦というお酒の原料になるお米から少し品種改良したのは「権座」という米を島でつくりました。それでお酒をつくろうということで、その島でしかつくれないお米でお酒をつくった結果、美味しくて、店頭販売されるとすぐになくなり、予約でいっぱいという状況になりました。

そこで、今度はその島で農業体験として船で渡り、農業をするというイベントをすると、まず地元の方が来られて、次は市外から来られた。次には県外から来られて年々増えてきました、そのことにやはり喜びを感じてといいますか、まちを挙げて若い人からお年寄り、おじい

ちゃん、おばあちゃんまで必ず行事やイベントに参加されて、皆さんでもてなしをされていますが、これも一つの風景だと思います。

また、そのときに考えられたのが、そこに渡るのに櫓でこぐのもいいのですが、時代が時代なので今度は屋根にソーラーを載せてソーラー船をつくられた。スピードは出ませんが静かにスーッと進み、それがまた景観になって、普通の櫓で渡るよりもソーラー船に乗りたいという方がどんどん増えてきたということで、やはり地元がやる気さえ出せば、次から次へといろいろなアイデアが出て、よみがえらせるといいますか、今まで潜んでいたものを世に出してきたのではないかと思います。

もう一方では、先ほども言いましたように、ブロック塀の家が生け垣にすると言われたら補助金を出していますが、国も市もこのような補助金はありません。ではどうということかというのと、そのまちで株式会社、いわゆる浅小井という発想で、農地が圃場整備をされたとき非農地地というのをつくって、その非農地地に墓地をつくり、お金もうけをしました。それは近辺になかったもので、自治会がやるということで信用もあり、いっぺんに売れるというか借地が増えました。今2期目で、それももう完売されて2億円ちょっとというお金でもって先ほどの補助をしています。また、道が狭くても市にお願いすることなく、自分たちでその工事をするかわりに、出し合いの道路でやっており、市道だから市にやってもらえと言う人は一人もいません。私は、このことは一つのまちづくりにもなり、ひいてはすばらしい生け垣ができ、景観づくりになっていたのではないかと思います。やはり住民の皆さん方が目を覚ましていただく、これが一番大切なことだと思います。

○横張 ありがとうございます。

最初にはよいリーダーがいて、そのリーダーが歴史をひもときながらその価値を語り、それが行政を目覚めさせたというお話でした。さらに、それが近年になると、イベント等を通じてさまざまな地域のやる気がそこに加わり、しかも、行政に住民が頼るのではなくて、むしろ行政を率先して自分たちで、いわゆる現代流の言い方をするとファンディングをやってお金を集め、そして、さまざまな展開をしているところが、今の近江八幡のまちをつくっているというお話でした。

さて一方、渋谷市長にお伺いしたいのですが、先ほど羽数調査をしている子どもたちが、ツルは心の宝物なのだと言って折りツルをつくったという非常に温まるお話を伺いましたが、こうしたツルにまつわる文化を出水の景観につなげていく上で、一体どのような仕組みを考えら

えているのか、あるいは今後どのような仕組みを展開されようとしているのか、何かお話がありましたらぜひお聞かせください。

○渋谷（出水市長） ツルは、先ほど言いましたように出水に越冬するためにシベリアから約3,000キロ飛来してきます。2月になると早速、マナヅルとナベヅルが主にやってきますが、マナヅルが先に北帰行を始めます。もう既に1,000羽近くが北帰行をしています。1万羽ちょっとの中で10分の1ぐらいが北帰行を始めたわけですが、これは3月いっぱいにかけて、ナベヅルは3月末までに北帰行を始め、4月になるとすべて北帰行が終わるということになります。したがって、現在の鳥インフルエンザも3月いっぱいまでは心配していかなければならないということです。

ただ、地元の荘中学校では、ツルクラブが組織されて、50年にわたって羽数調査をやっています。また、環境省の予算で平成8年から地域内分散が図られて、高尾野中学校のツルクラブの子どもたちが同じように羽数調査を始めております。50年と15年の歴史ある羽数調査で、子どもたちが実績をつくってきており、大変貴重な役割を子どもたちが担っているということです。

そして、その子どもたちですが、荘中学校の場合は、おじいさんから、もう3代目の子どもたちが携わっているという歴史的な長さを持っているわけです。したがって、この荘中学校の校区にはおじいさんから、お父さん、お母さん、そして、今の現役の子どもたちまで3代にわたって羽数調査の経験をした人たちが住んでいます。この時期、ツルがいることはもう当たり前前の風景になっていて、まさにツルとの共存・共生が図られています。

そのことから、子どもたちをして、今回の鳥インフルエンザの発生で、ツルは私たちの心の宝物だと言わしめたと考えているところでした。今後、このツル文化を景観対策の一策として、どのように生かしていけばいいかということは、今後の課題であろうと思います。また、ツルの生態等を展示したツル博物館、クレインパークいずみを拠点にしながら、その景観対策にも取り組んでいきたいと思っていますところです。

○横張 ありがとうございます。

ツルがいることが当たり前前の、まさに景色、風景になっていて、それを今後の施策の中にどう生かしていくのが課題であるというお話であったかと思います。

さて、また、両先生にお願いしたいのですが、先ほど岸井先生のほうからも文化あるいは人を景観にどう取り込んでいくのか、あるいは逆にその文化や人のある種の発現として景観をど

うとらえていくのかということが大きな課題になるだろうというお話がありましたけれども、今の両市長のお話、あるいはこれまでの議論をお聞きになって、その辺について、これまでかわられたさまざまな事例等も含め、何かこうした展望があり得るのではないかというお話をいただけたらと思います。

○岸井 先ほど景観をビジネスの材料にしてもいいのではないかというお話をしましたが、これは、ある意味では景観まちづくりの短期的なビジネスモデルです。今まで守りつつあるもの、大事にしたいものをいかにして守るかということに、そういうサイクルを入れていくということですが、みんながそれをやり出していますから、当然淘汰が始まると思います。みんなが、それはもうかると思ったらやります。淘汰が始まると、結局いいものが残るという世界になるのですが、どこでその差がつくかということ、今の段階だと、これまでの10年間を見たときに公共空間とか民有地の中のルールというアクティビティが、まだ融合までいっていない感じがするので、多分、次は、公共空間も含めて、公と民の世界が融合を早くやったところが勝ちだと思います。これをやるには公共空間の管理をどうするかという問題があつてなかなか大変ですが、そこを解かないと勝てない。そこをやったところが地域としての魅力がぐっと上がるだろうという感じはしています。それは短期的な話としての一つです。

もう一方で、少し長い目で見ると、先ほど来、ツルのお話もありましたし、お堀のお話もありましたが、ビジネスというのは短期でお金をとらなければいけない、回らなければいけないのですが、そんなことを考えていたらできないということがあるわけで、そうでないモデルをつくらないといけないのかなと思います。これは、個人個人がそれぞれ競争していいものをつかまえない、強くなりたいたいという遺伝子と、種を残していくという継承する遺伝子と両方あって、その継承するほうもやはり我々の遺伝子であるということなのです。

ただ、一人一人はそう思っているけれども、それがなかなか形として、あるいは地域として根づいていかないところがあるようにも思いますが、皆さんが、思いを持っているのだと思います。その思いをいかにして現実のものに結びつけていくかということについては少し時間がかかります。でも、短期のB/Cとは違って、時間をかけてもやることがあるということ認識したほうがいいのではないかなと。パリはどうやって今のパリができているのですか。つくったのは150年前ではないかと。神戸の六甲山はどうしてあんなになっているのですか。100年前ではないかと。仙台はどうしてつくったのですか。50年前に木を植えたのではないかと。ドイツのモールはどうしてつくったのだと。40年前からああいうふうにしたのではないかと。要は、そうい

うことは時間をかけたら必ずできる。そういうすごく骨太な、我々が次に何を残していくのかということについても、ぜひ景観まちづくりという一つの柱にしなければいけないのではないかという気持ちを、今持っています。それは、やはり人だし、いろいろな仕組みだと思えます。

正直に言って、私はわかりませんが、自分の息子、娘に金をやるのはちょっと惜しいと思うけれども、孫だったらやってもいいと思うので、余り短期で勝負しないで、おばあちゃん、おじいちゃん、その孫とかその次のために何か残そうではないかという話はあるのではないのでしょうか。意外と、これからやると、50年後ぐらいにはぐるっと回ってすごいまちができるかなという、願望ではありますが、そんな気がします。

○横張 ありがとうございます。

短期的にせこいことを考えずに50年、100年の計でまちをどう育てていくのかといったところにその思いがつくられる、継承されていくものがあるのではないかと、また、そうした思いの継承のためには、やはり人、あるいは人づくりであるということではないかと思えます。

秋田先生、いかがでしょうか。

○秋田 今日お伺いした3市は景観まちづくりというものが非常にうまくいっているところだと思いますが、その特徴として連鎖性というものがあると思えます。一つの活動が次につながり、その活動がまた次につながりと、いずれの市もその活動がどんどん広がっていったということが非常に重要で、さらに、その連鎖性に加えていろいろなことをつなげていく力があつたということが非常に大きいと思えます。

例えばツル一つとっても、ツルと景観はすぐ結びつくものではないと思えますが、これが市の象徴的な景観ということで結びつけていったこと、それが小学生の活動などいろいろなところに連鎖していったところが非常に大きいと思えます。

景観まちづくりでくじけるところというのは、大抵、この連鎖性がないというか、石を投げても波紋が広がっていかないときに壁にぶち当たると思えます。最初の石を水の中にどうやって投げるかということが非常に大事で、それがうまくいかないと、例えば行政が積極的に景観まちづくりをしようと思っていろいろ石を投げても、その石がうまく波紋をつくってくれない、石を投げることすらやめてしまおうかとなっているような自治体もあるかと思えます。

私がお手伝いさせていただいているところでも、何となくそういう気配が漂っているところもありますが、やはりそういうときは、どうやってうまく石を投げて活動が次の連鎖性を生み出すようになるかを考えることが一番大事だと思えます。

少し具体的な事例を出しますと、例えば神奈川県の実鶴町で景観まちづくりのお手伝いをさせていただいています。長い間、行政がかなり引っ張って景観まちづくりというものをやっていた。なかなか住民の参加が景観まちづくりにならない、景観形成、景観づくりになってしまふというところが悩みで、景観法ができて景観計画をつくる時に何とか住民参加を取り込みたいということで、景観まちづくり学校というものを何回か開催しました。ほかの自治体でもよくやられると思いますが、その中で景観計画に何か意見を言いたい方々に対して個人での意見は受け付けません、集団になってください、グループになっていただければ意見を受け付けますということを言いまして、それで、実鶴の中で初めてまちづくりのNPOができたという経緯があります。人数がそれほどいないのでなかなか活発には活動できていないのですが、次の活動につながったという部分があると思います。

ですので、行政のほうでうまく石を投げて、次の活動に波紋を広げていくという仕掛けも、人、仕組みの中で非常に重要になってくると私は思っています。

○横張 ありがとうございます。

秋田先生、今、最初の一石がとても大事だと。それを誤ると連鎖がとまってしまふというお話だったと思うのですが、実鶴の例としては、個人で意見を言うのではなくて集団として意見を言ってくださいという最初の一石が、その後のうまい連鎖を生んだということになるのでしょうか。

○秋田 はい、そうですね。うまい連鎖かどうかはわかりませんが、少なくともこれまで個人レベルで景観まちづくり活動を行っていたものが集団になりました。集団になることによってどういうことができたかという、例えばですが、実鶴町で景観まちづくりに関する事業をしようと考えたときに、個人ではなく、グループに声をかけることができるようになった。さらに、そのグループで活動することによって個人ではできない活動に広がった。具体的なことを言うと、美のまちづくりということで知られているのですが、その象徴的な建物であるコミュニティ実鶴がかなり老朽化していました。そのグループの中で障子の張りかえだとか垣根の作りかえだとか外構の作り直しをして、さらにそこに町外の住民を招いて景観まちづくりのパネルの発表をするという、一人ではできない活動につながりました。

○横張 ありがとうございます。

この点、いかがでしょうか。例えば富士谷市長、行政のほうとして、先ほどのお話ですと、最初は余りリーダーシップを発揮するのではなく、むしろ市民の側からの働きかけの中から次

第に行政のほうもそれを突き上げて動くようになってきたというお話でしたが、そうは言いつつも、行政のこれまでの取組の中に、今、秋田先生がおっしゃったようなうまい石を投げたがゆえに次の連鎖につながっていったという点は何かありましたか。

○富士谷（近江八幡市長）　そうですね、エビで鯛を釣るとは言いませんが、やはり最初はある面では国の事業をちょっと持って行って、こういうのがあるけれどもどうなのというふうに言っていたこともあるわけです。それで食いついてこられたところもあります。でも、今は近江八幡というのはボランティアが非常に盛んなのです。特におやじ連というのがありまして、いわゆるリタイヤした人たちが10グループつくっています。

例えば「八幡山の景観をよくする会」、月に一回ぐらい出て伐採をします。そうすると、タケノコの時期だと、そのタケノコをとって、子どもたちを寄せて炊いて、それを食べさせる。そうすると、親まで集まるわけです。あるいは、その切った竹を竹炭にして、それが商品になるわけです。あるいは「白鳥川をよくする会」は、家庭から出る生ごみを集めて肥料にして、それを使って白鳥川という一級河川の土手に花を植えます。それで、きれいな四季折々の花が咲きます。あるいは子どもたちだけだと、「琵琶湖お魚探検隊」。だいぶ品種が少なくなったのですが、いろいろな魚が湖にいます。それを子どもたちが一生懸命とる。そのように10のグループの人たちが何らかの活動をしています。

それも最初はやはりリーダーがいたからだと思います。行政のほうも必要最小限の補助だけをしていました。それが輪を広げて、器用な人は松ぼっくりで芸術品をつくり、年に一度、市立図書館を借り上げて展示会や品評会をして、それを商品化するなど、今はもう行政が引っぱられているという感じなのです。やはり魅力があれば人間というのは銭や物ではなく進んで参加します。そのことが結果として景観づくりに大きく寄与しています。魅力があるから、雨が降ろうがやりが降ろうがもう決まった日にはやはりそこに行き、いろいろな話をして、そこでまたコミュニティができます。この前マスコミが報じていましたが、今、八幡の場合はボランティア参加率が48.6%で比較的高いと思います。次は長野県の何市でしたか、28%ぐらいでした。そういうふうにしていただいているから、行政は非常にありがたいと思っています。

○横張　ありがとうございます。

行政はもう必要最小限の補助でいいというお話が、非常に印象的であったと思います。

渋谷市長、いかがですか。今のお話を聞かれていて、やはり行政の側として今後、ある一石

を投じていこうとするとすればどの辺にそのポイント、肝があるか。あるいは、これまでの出水市の取組の中でもこういう一石がうまく次の波紋を呼んだといったご経験がありましたらぜひと思いますが、いかがでしょうか。

○渋谷（出水市長） 景観法に基づいて私ども景観条例を策定しましたが、その中で先ほどもありましたように、看板の事例で、色合いが奇抜なもの等については自粛していただくということで、ある意味、この景観を守っていくためには規制があって、住民の方々の理解と協力が必要であれば果たせないところがあります。したがって、住民の中にはそれに対して抵抗感がどうしても発生してくるのではないかと思います。そこをどういうふうに理解していただいて協力していただくか、まずそこも第一義的には入り口で、その辺の景観に対する住民の理解を求めていくことが大変大事だと思っています。

それと、関心を引き出すためには、私ども麓武家屋敷群とその関連します旧来の商店街との結びつきです。商店街の背後に麓武家屋敷群があり、ここに景観の一体性を持たせる必要があるということで、今後、商店街等の増改築等がある場合には、武家屋敷群を連想できるような一体感をどうやって構築していくか、つまりは、対象となる住民の方々にどう理解していただくかが一つの山だと考えています。

今回とりましたのは、景観まちづくり講座というものを開設して、そういう両地域の皆さん方に集まっていただいて、そこでいろいろ議論をしていただいて理解を深めていただいたという経緯があるわけです。したがって、ハード面における、保護、保全といったようなものの取組みと、先ほど申しましたように、その地域に伝わっている伝統的な芸能や伝承文化、あるいは風習、風俗、こういったもの、例えばツルで言うと、私どものところ、ツルを迎えるフェスティバルが11月にあり、3月になるとツルを送る夕べというのがあります。みんなでツルに来てもらおう、そしてまた、来たツルを温かく見送ろうというイベント等も開かれていまして、こういったものと、ソフト的なものとをどう結びつけていくのか。

それと、先ほどお示ししたように、出水市の産業としてはかんきつ栽培が盛んです。また、ケタ打瀬漁といって、この2月には大きな帆かけ船、皆さん方の資料で出水市のところで7ページの上のほうに絵が出ておりますが、ケタ打瀬、大きな帆を3本立てて北風になびかせて、底網を引いてエビをとる漁です。このケタ打瀬漁が、この時期の風物詩にもなっていて、上空には北帰行するツルが舞うということで、写真マニアの人にとっては絶景の写真ポーズになるわけです。これも一つの文化であり、また景観であろうと思っています。

特に、かんきつも丘陵地帯の段々畑にミカンが植えられていて、それにミカンがなる。黄色いミカンが色づく。それも一つの産業における景観だと思っていて、ある意味出水市を特徴づける産業だと思っっています。

それと、出水市は武家屋敷に倣って、市木としてイヌマキを市の木として指定していますが、このイヌマキを街路樹として市街地等に植栽しています。このイヌマキが醸し出す雰囲気は背後にある武家屋敷と連動して、一つの景観をなしており、こういった産業とか、植木・緑化樹等が非常に盛んな生産地ですから、イヌマキ等をもとにしながら一つの景観をつくり出していくといった産業における景観づくりも今後やっていく必要があると位置づけていまして、郷土芸能や伝統的な生活文化と同時に産業を生かした景観づくりも今後取り組んでいかなければならないと考えています。

○横張 ありがとうございます。

今まさにお話にありましたように、単に景観を景観と切り離すのではなく、産業といかに連携づけるか、あるいは景観をある種誘導していこうとした場合にはどうしても規制が入ってしまうのですが、そこには、例えば地元に対する講座を開くといった息の長い取組の中で徐々に市民の方々に理解を得るといった努力が必要であるといったお話と拝聴しました。

さて、予定の時間があと10分ほどになってしまいました。最後にこの話をどう広げていくのかということなのですが、ちょうど今日のお話の中で農村部における景観保全の取組がございました。

我々景観というどうしても都市を中心に考えてしまいますが、農村と一体になった景観の取組について、今後どのような展開をされようとしているのか。最後の一言ということで、閉めの言葉とあわせ、ご意見をいただきたいと思います。

○渋谷（出水市長） 先ほど来からいろいろと申し上げさせていただきました。私どものところは、言うなれば田園地帯であります。そこに広がるさまざまな景観があるわけで、今後、それらをどのように保存し、継承していくかということは、関係する住民の方々にどのように理解していただいて協力をいただくかということで先に進んでいくことだと思っっています。

特に、田園地帯と同時に中山間地域もあります。棚田等の保存、保全、これらも必要だと思っっていますが、すべてこれらは一朝一夕にできることではないのです。代々培われてきたいろいろな文化を今後どのように生かしていくか。今いる私どもが次の世代を担っていただく若い方々にこの景観の保全・保存等について、あるいは文化の継承等についてどう理解をしていた

だか、まさにそこに人材育成の重要さが潜んでいるのではないかと考えていまして、今、人材育成にもいろいろと取組をしているところです。今ある景観も、それを守っていくことで50年先、100年先に評価される、そういった大変歴史的に長い取組みが必要となる景観行政だと、私は位置づけていまして、今ある私どもが次の世代にどのような景観を残していくか、その責務が今、課せられていると思っています。そのことを次の世代の人たちにも理解をしてもらって、長くその景観が守り保存されていく、そのことで一つのまちの雰囲気というものが醸成されていくと、私は思っていますので、今後も粘り強くそのまちの特性、私の地域の特性を生かした景観づくりに努めていきたいと考えています。

○横張 ありがとうございます。

では、富士谷市長、お願いいたします。

○富士谷（近江八幡市長） 先ほどから申し上げていますように、近江八幡市の景観づくりは40年前の八幡堀の保存再生運動から始まったわけですが、決してこれは観光を目的としたものではありませんでした。しかし、よみがえりましたこの八幡堀は、今や観光客でにぎわっています。先ほど申し上げた時代劇のロケーション、本当に数多くお見えです。

そして、景観づくりも決して観光を主としたものではありませんが、住みやすい、居心地のよい地域というのは人を引き寄せる魅力があると実は感じています。やはり人が来てくれるというのは、住みやすさあるいは居心地のよさというものが非常に大事だと思います。

今後は、さらにこの受け入れ態勢の充実を図らないことには、もう観光シーズンになりますと、渋滞して近隣の住民から苦情が殺到していまして、それは行政がきちっと整理をしなければなりません。だから、駐車場の整備も行おうとしているところでして、この態勢の充実、受け入れ態勢、これを図る必要があると思っています。そのためには、交通渋滞の解消や、あるいは観光でどこを回っていいのかわからない人がたくさんお見えですから、3時間観光ルートの開発などもこれから努めていきたいと思っています。

それとあわせて、幻の名城、信長が築いた安土城です。これを何とか形にしたいと。天守閣は金箔ですし、それから瓦もいわゆる金箔押しと言われているので、何とかしたいなと思っていますが、今ちょっとハードルが高い問題がありますので、何とか解決したいと思っています。

もう一方では、市内の農地の圃場整備がされていまして、整然とした田園が広がっているわけです。美しい農地を広げるためにも、できれば早急に農村振興基本計画の見直しをしていく

ことが、より景観づくりに拍車をかけるものだというふうに思っています。

そういったところにこれから力点を置いて進めていきたいと思っています。

○横張 ありがとうございます。

○秋田 それでは、ちょっと今日の全体的な感想ということで述べさせていただきたいのですが、一番最初に後藤先生が景観まちづくりは市民自治の成果だとおっしゃいましたけれども、まさに近江八幡は市民自治の成果の一つだと思います。商人のまちですから、行政が引っ張られるというのもある種伝統的に当然というか、それが普通の形なのかもしれません。コミュニティ活動が盛んというのも住民自治の成果の一つだと思います。

一方で、出水市長がおっしゃったように、行政が引っ張っていくという面も必要だと思います。この住民自治と行政による強いリーダーシップの両輪が、景観まちづくりを進めていく駆動力になると思います。行政が強い意志を持って景観まちづくりをする、意思表示の一つが景観行政団体になることであり、それから、公共施設の整備を積極的に進めていく、景観まちづくりではなくて景観形成、景観づくりを進めていくということになると思います。

この2つが、どちらが欠けても景観まちづくりというものはなかなか進まないのではないかと思います。

また、新しい景観まちづくりのキーワードとして今日の議論を通じて考えたのは、「つなげる」ということと「連鎖させる」という2つのことだと感じました。一つのつなげるということですが、これまで都市計画というものは分けるということを中心に考えてきたと思います。例えば、市街化区域と市街化調整区域、あるいはゾーニングということでも常に分けるということを中心に考えていましたが、景観まちづくりでは、都市と農村をつなげる、それから景観と産業をつなげる、経済をつなげる、そういうふうに「つなげる」ということが新しいキーワードになると思います。

もう一つのキーワードである「連鎖させる」というところですが、この活動を連鎖させるエンジンになるものが幾つか今日の議論の中で挙げられたと思います。一つは、たくさんの人の思い、あるいは一人の思いという部分です。それから、ほかにあるものとしては行政がきっかけをつくる。強い意志で何かをやるということ。あるいは石を投げるということです。それから、住民の自治力というものがあつたと思います。

いずれにしても、この活動を連鎖させるエンジンをつくって、さらにそれが持続するようにきちんと自治体が制度をつくっていくことも重要だと私自身は思っています。

以上、今日の感想になりましたけれども、どうもありがとうございました。

○横張 ありがとうございました。

○岸井 今日ご紹介いただいた各市はそれぞれ頑張っている市で、私自身は先ほど来お話ししているとおり、景観という言葉がやや上滑りをし出している感じもあるので、逆に言うと懸念を抱いています。景観計画をつくるというのが、何か行政の一つの義務だと思ったり、あるいはブームだからやっているのだというのでは形骸化が進むのではないかと。それを大変懸念しています。

形骸化しないようにするにはどうすればいいのか。それは、我々が、もう既に人口減少で高齢社会になっていて、何をやらなければいけないかということと、景観をどうつなげるかということが非常に大事だと思います。

実は、まちづくりは大変おもしろいのです。やや誇張して言いますが、公共空間であったり、人の土地であったり、勝手に絵をかくのですから、こんなふうにしたらいいと思うのですから、これはおもしろいに決まっているわけです。そこに参画できることがもし少しでもできるならば、そのこと自身は生きがいにもつながるし、私は大きな社会の中では、みんなが元気になるという意味において、大変大事なことなのではないかと思えます。

ただし、そうしてやり出すと、みんな勝手に自分で人の家に絵をかき出して、恐らくきつとけんかが起きます。だから、やはり最初の一石、どう誘導していくかということが多分大事なのだろうと思います。下手をすると、そこでパンクしておしまい、もうけんかになっておしまいではなくて、いかにしていい例をまずつくるか。あるいはどうやれば失敗しないのかを学ぶ。これは今日の事例にもあるように、いろいろなことがもう各地で行われていますから、散々行われていると思うので、やはりいいものは何かというのは、これは専門家の役割として十分に議論しなければいけません。こういうものはいいのだというふうに積極的に言わなければいけないと思うし、どういう仕掛けでやったらこうなったのかという事例については、全国市長会だとか学会もその役割を担うのでしょけれども、そういう生の声を集めて流布するような、はっきり言いますと、行政がやっても信用してくれませんから、直接それぞれのグループが情報を交換できるような仕組みを市長会なり学会がうまくつくるということになるのかと思えます。

行政としては、ぜひ行政の方にお考えいただきたいのですが、景観のまちづくりというのは、要するに、景観というのは人とまちとの関係をあらわしているものですから、すべての行政の

アクションはきっかけになります。道路をつくっているのではないのです。まちをつくっているのだから。公園をつくっているのではなくて、まちの公園をつくっている、人と人の活動をそこで何とかしたいと思ってやっていらっしゃるのだから、すべての行政のアクションはチャンスだと、そこをやはり忘れないでいただきたい、そこにいろいろな人が出てくるチャンスをつくってあげて、きっかけをつくってください。そこが、もしうまくできれば、元気なまちが増えていって、少し時間がかかるかもわからないけれども、恐らくいろいろないいまちができるのではないかと、同じようなまちではなくていろいろないいまちができるのではないかと、そう思います。

○横張 ありがとうございます。

ほぼ予定された時間になりました。最後に1つ宣伝をさせていただきたいと思います。

私ども都市計画学会は、今年60周年を迎えました。そして、この秋に記念のイベントを企画しております。学会の大会にあわせまして東大の安田講堂で記念の会を予定しています。ぜひご足労いただきたいと存じます。

その場で、ブラタモリのチーフプロデューサーの方に来ていただいて、番組制作の裏話なども含めた話をさせていただこうという企画を練っております。そのチーフプロデューサーの方以外にも何方か、今交渉しているところですが、そうした企画をしていますのでぜひいらしていただければと思います。

何でブラタモリなのかと考えてみますと、確かに今、非常に人気の番組でして、多分、ブラタモリは今までにない視点を2つ提示しているのではないかと思うのです。一つは、まさに今日の冒頭の後藤先生のお話と関連しますが、生活景の価値を発掘しているところ、要するに、タモリが一見何でもないまちを歩きながら、あれっとか何か思ったことを契機にそこからそのまちの履歴を掘り起こしていって、どんどん膨らませていき、今までは重厚壮大なすばらしい大きなものではなくて、もっと生活の中に溶け込んでいて、ちょっと見ただけではわからないものに価値を見出していっているというところがあの番組の非常におもしろい一つのポイントだと思います。

もう一つは、パッと見にはわからないけれども、地域の歴史を発掘していく、あるいは人々の営みがどうあったのかということを発掘すると、そのことが俄然おもしろく見えてしまうという、つまり見るのではなくて読むということを経験をめぐって、あるいはまち並みをめぐって提示しているところに、あの番組のおもしろさがあるのだと思います。

私、実はランドスケープを専門にしているのですが、私どもはランドスケープというのは見るものではなくて読むものだということを学生に常々講義等で言っていますけれども、まさに景観あるいはまちを読むということがあの番組の背景にはあって、そこが非常に人気を博している大きな理由なのではないか私は見えています。

あの番組は実に人気で、全国の市町村からぜひうちのまちをとという売り込みがすごいそうで、あのチーフプロデューサーの方が、余りにもすごいので、あの番組は1年通しではやらずに半年間やったら半年間休んで、その間に少しいろいろな提案を淘汰させていって、またいいものをまた半年というような、そういうシフトでやっているのだということをおっしゃっていました。冒頭に宣伝と申しましたが、その方に来ていただいて、いろいろおもしろい話をさせていただこうと思っていますので、今年の11月18日金曜日ですけれども、ぜひ今からでもご予定いただければと思います。

それでは、予定の時間をやや超過してしまいましたが、以上をもちましてパネルディスカッションを閉めさせていただきたいと思います。